事業報告書　団体名：NPO 法人打楽器コンサートグループ・あしあと

事業名	心に響く打楽器つくっちゃお♪

【当初計画の事業目的（取組課題）と実施効果】

事業目的

様々な障害を持つ方、子供たちとその家族、母親、保護者にスポットを当て、地域で協力できるイベントにする。
〇オリジナル打楽器を作り、その楽器と共に生の本格打楽器を気軽に楽しむ体験型コンサート。見る、聴く、触る、そして、作るという項目を加え、五感に刺激し、子供の成長過程を創り上げ、日々の生活を忘れるようなリラックスする空間で一緒に音楽アートで楽しむ日とする。プログラムは子供たち、一般的に親しみのある曲を演奏し、オリジナル製作打楽器とのコラボレーションも行う。プロが使っている本格打楽器を触れてみる機会を設け、本物の楽器の迫力を気軽に体験してもらう。
〇イベントに出かけられない状況下の児童達と共にその保護者の集まる施設・または障がい者の就労支援施設に出張する。母親や家族は周りに相談できる人、機関があまりないと感じている。コロナウィルス影響でイベント不足により子供に成長期の成長を止めない・障害を持つ方、またその周りの家族が孤立しないことが目的。
〇この事業によりどんな障害や問題を抱えていても、母親・家族が一日一日の瞬間がかけがえのない時間である事を実感し、特別の一日」を創り上げる。音楽・アートの絶大なる影響力によってその目的を達成させる。イベント開催日に母親や保護者・家族、障がい者・障害児自身を今後も手助けしてくれるように思える人材を地域の中で見出す。施設のスタッフの方はもちろん、地域の方も参加できるイベントにする。悩みを抱える母と家族を助ける人材への橋渡し、役立つ場所・施設、の周知・発信。イベント開催が施設側、行政側にとって潜在的に問題を抱える母親達を探し出す機会にもする。
また時期的には難しい場合、配信準備を揃えておく。

事業計画

※一緒に楽器を作るのプログラムに関してはコロナの状況の様子を見ながら決定する（AorB）

①-A 一緒に作る　30分【作る・創造する】通常

オリジナル楽器制作。部品は団体手作りのものを用意し、世界に一つだけのオリジナル楽器を作る。いろんなもので製作し、音を確かめ、自分の好きな音を創造し、近づけることで、手先の作業と聴力、想像力を結びつけ、学校の図工などでは出来ない工作が楽しめる。親子、子供同士、地域の方々、当団体スタッフなど、あらゆる世代の方と話しコミュニケーションの場を設ける。

①-B 一緒に作る　0分【作る・創造する】コロナ対策をする場合（状況に応じて）

オリジナル楽器制作の時間は感染症対策のため、実施せずに代わりに4種類（シェーカー、マラカス、タンバリン、鈴）から選んでもらいプレゼント。飾りつけキットはあらかじめ個別パッケージし、飾りつけは自宅、または後日事業所で行う。

②コンサート　30分【聴く・見る・歌う・踊る】

近年の学術的研究結果でも、子供の脳の発達には聴覚・視覚に同時に体験させるのが効果的と出ており、打楽器はバチの動きや手の動きなど視覚効果も高い。
珍しい世界の打楽器を紹介する。そして、情操教育を生の音楽から感じさせる。本格的な打楽器コンサートの提供。
コンサートの曲目も子どもたちの年齢、障害の度合いに合わせて、当日決定する。
アクリルカーテン、フェイスガード越しに密を避けてのコンサート実施。打楽器ならではの迫力あるコンサート。

③体験コーナー　20分【リズムに合わせる・体験する】

子供たちが作った作品を使って、プロのミュージシャンと打楽器コンサート参加。自分の作ったもので演奏することで達成感を得られる。
コンサート後の本物打楽器体験コーナーあり。子供たちのソーシャルディスタンスを保ち、使用するバチが使いまわしされないようにマレット大量用意、都度のアルコール消毒。

こういった状況下でも本物の音の体験実施。この経験が家に帰って保護者との会話のきっかけとなり、音楽や芸術への興味によって、可能性のある子供たちの世界を広げることができる。

【実施時期】
2022・7　　委託金交付決定
2022・7～10　施設との挨拶、日程打ち合わせ・その他詳細を打ち合わせ選考・決定
　　小規模で必要に迫られる施設選出、コラボ企画のマッチング、アレンジ・リハーサル開始
2022・10～2　順次コンサート開催　障害者支援施設・障害児をもつママの会、地区センター等計5公演
【場所】
障害者施設、障害児をもつママの会、また施設、サークルなど
【対象者】
障害者施設入居者、通所者、障害児をもつママの会会員、また施設、サークル見学者など
【募集方法】
各施設、また施設関係者にチラシ各公演500部程度を配布、その他 SNS、当団体 HP、Facebook での公募（各公演親子20～30組程度）
【感染症拡大防止対策】
アクリルカーテン、奏者の PCR 検査、MAーT（ウィルス 99%死滅）による加湿器使用、フェイスガード、体験用バチの都度消毒、マスク、アルコール消毒、体温計完備、コンサート途中の換気タイム、ソーシャルディスタンスの徹底。

実施効果

このイベントが開催されたことによって障害を持つ方が 3 年近くリアルで経験できなかった心から芸術を楽しむ事ができる。

1. 打楽器の特性を生かし障害を持つ方が最大限楽しめるイベント

打楽器は障害のある全ての方に万能な楽器である。振動がとても大きいので耳が聴こえなくても音を感じることができる。またバチや手元の動きが見ても楽しむことができる。自分たちの創造性を生かした手作り楽器はどんな方たちも自分たちの最大限できることで一緒に演奏することができる。
手作り楽器は派手な色のキットやもこもこの手触りのキットなど、目が見えなくても手触りの違うもので楽しめるようにする。
コロナ感染症が収まらない昨今、障害を持つ子供たちは感染症に弱い。戸外の演奏会に出かけるのはリスクが高い。感染など気を配った普段から通いなれた施設で行うことで、リスクの軽減を図る。
そして飛沫感染がない楽器、アクリルカーテン越しでも聞こえる楽器、体験の際も使いまわしをしないでいい楽器、これらすべてをかなえるのが打楽器のみのコンサートといえる。

2. 障がいをもつ子供、大人の家族へのフォロー

またその施設内で母親同士・家族同士・地域との関わり、あらゆる「社会との関わり」が出来、子育て情報や障害についての情報を得る機会となる。また、イベント開催することによって社会・行政の方から子育てに困難を極めている母親・家族達に気づく可能性が高まる。母親・家族たちはこれを機に悩みを共有できる仲間作りや、相談やカウンセリングが出来る機関を知るきっかけとする。子育てで安心・安全な居場所を知ってもらう。

3. ハイブリッド体制でイベントの自由参加

リアルコンサートとオンラインコンサートのハイブリッド体制を全公演に準備する。コロナの状況が芳しくない場合は創作楽器は個別包装し、家でも楽しめるよう《おうち時間》のイベントにしてもらう。
情勢に応じた感染症の正しい対策により一層の感染症対策の徹底。感染症対策は開催への必須条件で施設からの信頼、当団体への期待に応える。そうした「条件付きのイベント」開催を心がける。また行政との細かい相談の元「安全なイベント」実現が重要。
また物理的・心理的に来られない親子・家族がいる場合は状況に応じてオンラインライブ Instagram 配信。その開催場所となる施設の紹介、母親・家族の悩みを相談できる場所への誘致などの内容も取り組む。子育て期を家でも子供と楽しく過ごすプログラム内容、いつかリアルで参加できるコンサートの希望を与える。それぞれの求められるニーズに合わせて要相談。

【実施結果（成果）】

① 10/8・13:00-14:30・放課後等デイサービス花笑み・30人程度・チラシ 50 部・施設内配布
以下は初開催の施設
② 10/15・14:00-15:30・放課後等デイサービスサンライズ・30人程度・チラシ 50 部・施設内配布
③ 1/6・10:30-12:00・生活介護事業所ひらま・40人程度・チラシ 50 部・施設内配布
④ 1/17・16:30-・放課後等デイサービス・心花すげ・30人程度・チラシ 50 部・施設内配布
⑤ 1/28・13:00-14;30・放課後等デイサービスこぱんはうすさくら麻生教室・20人程度・チラシ 50 部・施設内配布

【実際の効果と課題】

自己評価としてはすべての施設で工作も楽しめて良かった。長いコロナ禍で十分な体制と対策を整えていて、結果として、目標にしていたイベント実施は時代が大きく移行していることも助け達成できた。ハイブリッド体制ではあったが結果としては、楽器作成もリアルコンサート体験も良い形でできた。
＜以下アンケートより参加者の意見一部＞
〇本格的な楽器でびっくりした 演奏も迫力があり、とても良かった
楽器作りも子ども達が楽しく参加でき、保護者も喜んでいた 子ども達が思っていたより工作に集中でき、楽しめていた。普段、どうしても「コンサート」へ連れて行く事が出来ず、音楽や楽器に触れる機会も少ないので本当に良い 体験になった。なによりも参加をした子どもたちの笑顔が音楽を通して溢れていて、「やはり音楽の力はすごいな」と痛感した
音に敏感な利用者さんも最後まで居る事ができ、実演もする事ができた
子ども達がみんなイキイキした目で見ていて、本当に楽しそうだった
〇感染対策については、フェイスシールド、加湿器をありがたがってくださり、こんな世の中だから何よりも実施していただきありがたいという意見もありました。

しかし当初計画時の実施効果の2の「障がい者障がい児家族のフォロー」のための行動が制限されていることもあり、参加は少なく、こちらは大きく課題として残った。次回はアフターフォローを含め、後日談のような意見もいただくようにすれば全体の効果が知ることができると思った。

4年間パラアート助成事業として訪問した各施設からは、再開催を強く求められ、当団体の採択された別の助成金で、その後毎年コンサートを実施してきた。（放課後等デイサービスシャインさぎぬま、児童発達支援ルームマオポポ、放課後等デイサービス夢門塾、生活介護事業所すえなが、ホップステップ放課後等デイサービス元住吉、放課後等デイサービスリアライズ溝ノ口、久地駅前、児童発達支援ブロッサムジュニア読売ランド前、放課後等デイサービスこぱんはうすさくら）
ともかわさきグループである生活介護事業所すえなが、あかね、おおしまは高評価を得た内容から紹介へとつながった。また別施設ホップステップ新川崎や放課後等デイサービスサンライズなどは、当助成事業の訪問施設に限りがあるので、別の採択助成事業をあてて開催した。
いずれも、コロナ禍での障がい児、障がい者向けのイベントでありながら必要性を感じて、実施を懇願されての開催であった。

大きな課題として資金面と団体維持の部分でなかなか継続に困難を極めていることが残った。
人材や、音楽の中での福祉事業の拡大の難しさを感じた事業であった。
しかし、この事業は演奏家の団員にとって、またとない機会を与えられ、今後の音楽人生に大きく影響を与えたことは大きな成果であった。演奏活動の中でいつも感動を与えていた側であった自分たちが、人から感謝され、また参加者の笑顔、楽しんでいる姿に、感動をいただいたのは自分たちの方であった。こんな時代だからこそ、おなか一杯にならない音楽・芸術の是非が問われ自分たち自身も迷いながら生きている。しかし、今こそ助け合いが不可欠で、音楽を通じて社会貢献ができる環境に、音楽家の存在意義を感じた。音楽を楽しむ心に人と人との間に障がいはなくなんの隔たりもない。打楽器の特性を生かしたことで（気軽に鳴らせる、迫力、五感で感じる事ができる）アートが人々に与える影響を実感できた。